

Title	マーシャルとケンブリッジ学派の発展： 人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学に向けて
Sub Title	Marshall and the development of the Cambridge School : towards a moral science of economics on the basis of the study of humans
Author	谷口, 和弘(Taniguchi, Kazuhiro) Fruin, W. Mark
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2021
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.64, No.3 (2021. 8) ,p.79- 94
JaLC DOI	
Abstract	われわれは，人間研究と富研究の双方を射程としつつも前者を強調した科学としての経済学を追求し，ケンブリッジ学派の創設に貢献したアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の二面性について議論する。とりわけ経済学における人間研究に力点を置いたマーシャルは，人間の多様性・全体性を認識したうえで，人間の性格の変化というミクロ・レベルの人間進歩，および福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルの経済進歩の双方に焦点をあてた。そして，人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向した。実はこの志向性は，ケンブリッジ学派の1つの重要な特徴だと考えられる。われわれは，マーシャルが思い描いた人間と環境のミクロ・マクロ連環に立ち入ることは，モラル・サイエンスとして経済学を前進させるのに不可欠だと考える。 We focus on the dualities of Alfred Marshall who contributed the establishment of the Cambridge School by seeking economics as a science with emphasis on both the study of man and that of wealth. Marshall, who puts particular emphasis on the former in economics, sheds light on human progress representing change of human character at the micro level, on the one hand, and the resolution of issues on poverty through the enhancement of well-being at the macro level, on the other hand. He oriented to economics as a moral science on the basis of the study of man. In fact, such orientation is shared in the Cambridge School. We believe that to scrutinize the micro-macro links that Marshall envisioned is needed if the project of economics as a moral science can be moved forward.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20210800-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マーシャルとケンブリッジ学派の発展

—人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学に向けて

Marshall and the Development of the Cambridge School: Towards Economics as a Moral Science on the Basis of the Study of Man

谷口 和弘(Kazuhiro Taniguchi)

W.マーク・フルーエン (W. Mark Fruin)

われわれは、人間研究と富研究の双方を射程としつつも前者を強調した科学としての経済学を追求し、ケンブリッジ学派の創設に貢献したアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の二面性について議論する。とりわけ経済学における人間研究に力点をおいたマーシャルは、人間の多様性・全体性を認識したうえで、人間の性格の変化というミクロ・レベルの人間進歩、および福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルの経済進歩の双方に焦点をあてた。そして、人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向した。実はこの志向性は、ケンブリッジ学派の 1 つの重要な特徴だと考えられる。われわれは、マーシャルが思い描いた人間と環境のミクロ・マクロ連環に立ち入ることは、モラル・サイエンスとして経済学を前進させるのに不可欠だと考える。

We focus on the dualities of Alfred Marshall who contributed the establishment of the Cambridge School by seeking economics as a science with emphasis on both the study of man and that of wealth. Marshall, who puts particular emphasis on the former in economics, sheds light on human progress representing change of human character at the micro level, on the one hand, and the resolution of issues on poverty through the enhancement of well-being at the macro level, on the other hand. He oriented to economics as a moral science on the basis of the study of man. In fact, such orientation is shared in the Cambridge School. We believe that to scrutinize the micro-macro links that Marshall envisioned is needed if the project of economics as a moral science can be moved forward.

マーシャルとケンブリッジ学派の発展

—— 人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学に向けて ——

谷 口 和 弘*

W. マーク・フルーエン

<要 約>

われわれは、人間研究と富研究の双方を射程としつつも前者を強調した科学としての経済学を追求し、ケンブリッジ学派の創設に貢献したアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の二面性について議論する。とりわけ経済学における人間研究に力点を置いたマーシャルは、人間の多様性・全体性を認識したうえで、人間の性格の変化というミクロ・レベルの人間進歩、および福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルの経済進歩の双方に焦点をあてた。そして、人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向した。実はこの志向性は、ケンブリッジ学派の1つの重要な特徴だと考えられる。われわれは、マーシャルが思い描いた人間と環境のミクロ・マクロ連環に立ち入ることは、モラル・サイエンスとして経済学を前進させるのに不可欠だと考える。

<キーワード>

マーシャル、人間研究、ケンブリッジ学派、モラル・サイエンスとしての経済学、ミクロ・マクロ連環

1. はじめに

本論文では、人間研究と富研究の双方を射程としつつも前者を強調した科学としての経済学を追求し、ケンブリッジ学派の創設に貢献したアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の2つの二面性——すなわち、思想家とリーダーの二面性、および彼の体系のなかに共存する新古典派経済学と進化経済学の二面性——について議論する。

* 本論文は、慶應義塾学事振興資金による研究成果の一部である。そして、本論文に残されたありうべき過誤は、われわれのものであることをここに明記しておきたい。

とりわけ経済学における人間研究に力点をおいたマーシャルは、人間の多様性・全体性を認識したうえで、人間の性格の変化というミクロ・レベルの人間進歩、および福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルの経済進歩の双方——すなわち、人間と環境のミクロ・マクロ連環——に焦点をあてた。そして、人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向したとみなされる（たとえば、Caldari *et al.*, 2020; Loasby, 1989; Taniguchi and Fruin, 2020; Viner, 1941）。

実はこの志向性は、ウィリアム・ヒューウェル（William Whewell）にはじまり、マーシャル、ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes: 以下、ケインズ）をへて継承されたケンブリッジ学派の1つの重要な特徴だと考えられる（Taniguchi and Fruin, 2020）。マーシャルが思い描いたミクロ・マクロ連環に立ち入ることはモラル・サイエンスとして経済学を前進させるのに不可欠だ、とわれわれは考える。

しかし Whitaker (1977) は、「広範な人間観に依拠したマーシャルの試みは、後の経済学研究にたいしてほぼ影響を及ぼすことはなかった」（p 196）と述べた。マーシャルにとって、経済学は「あるがままの人間を扱う。つまり、抽象的な『経済』人ではなく生身の人間を扱う」（Marshall, 1961, pp 26-7）ことが重要だった。だが彼以降、経済学は合理的な経済人を仮定した実証経済学的研究（たとえば、Friedman 1953; Robbins 1932）へと変貌し、あるがままの人間を置き去りにした。だがわれわれは、かくも不幸に忘れ去られたマーシャル的な広範な人間観、および人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を復権させたいと強く願う。

かくして本論文は、人間研究者マーシャルに立ち戻り、ミクロ・マクロ連環を理解するための頑健な基礎となりうる彼とケンブリッジ学派の知的貢献を検討する。こうした営みは、広範な人間観に立脚した「モラル・サイエンスとしての制度経済学（IEMS: institutional economics as a moral science）」（Taniguchi and Fruin, 2020）を前進させるうえで確固たる基礎を与えてくれるものと期待される。

本論文は、以下のように構成される。第2節では、マーシャルと彼の弟子ケインズに注目し、ケンブリッジ学派の特徴について概観する。第3節では、マーシャルの2つの二面性を浮き彫りにしつつ、彼の思想と、ケンブリッジ学派の生成に導いた彼のリーダーシップの双方について論じる。そして最後に、結語を述べる。

2. ケンブリッジ学派の特徴：概観

マーシャルが長年にわたり、ケンブリッジ大学の経済学者に与えた影響は甚大であった。後述するように、ケンブリッジ学派とよばれる知のネットワークの生成は、彼の高貴な思想とリーダーシップなしにはありえなかった。実際ケンブリッジ学派は、マーシャルが1885年に政治経済学教授チェアをえたときに生成したといわれる（Hutchison, 1981）。

とくにケインズは、ケンブリッジ学派の創設者マーシャルこそが最初の生粋の経済学者で、物理学や生物学と比肩しうる正確さをもつ1つの独立した科学として、経済学の確立に貢献した最

初の人物だと高くもちあげた (Keynes, 1925)。したがってわれわれの見解では、ケンブリッジを世界における経済学の最高位の泉へと変えたのはマーシャルだという Stigler (1990) の評価は、あながち誇張だとはいえない。

ケンブリッジ学派は、世界経済が困難な現実問題を解決するうえで革新的なアイデアや方法論を提供した。とくに、この学派にとって重要な思想の発展を導いた「6人の巨匠」(Gram, 2011)——すなわち、マーシャル、ケインズ、デニス・ロバートソン (Dennis Robertson)、ピエロ・スラッファ (Piero Sraffa)、ジョーン・ロビンソン (Joan Robinson)、ニコラス・カルドア (Nicholas Kaldor)——を中心に世代をつうじて数多くの際立った思想家が生まれた (たとえば, Cord *et al.*, 2017)。そして、彼らによる知のイノベーションへと結実し、経済学のあるべき理論だけでなく現実経済を救済するための政策の形にも影響を及ぼした。

Geoffrey Harcourt (2003) は、ケンブリッジ経済学の伝統に焦点をあて、伝統とはすなわち、研究対象となる主題の歴史と先人たちの研究成果が今日の課題にとってどのような現実妥当性をもつかという点に表れる、と論じた。そして、マーシャルにはじまるケンブリッジ経済学の伝統にとって不可欠な3つの要素を、とりわけケインズの哲学的思考のなかに求めた。すなわちハーコートは、第1に主題にかんする諸問題の解明のために直観、法、数学などの多様な言語を活用する点、第2に複雑な経済システムを理解するうえで全体は部分の総和以上のものだと認識する点、そして第3に不確実な環境の下で最善をつくそうとする良識ある人間が導く原理に加え、人間行動が経済システムに及ぼす影響の解明に取り組む点を挙げた。そして、とくに第3の要素をマーシャル的だとみなした。

つまり、マーシャルにとって、ミクロ・レベルでの人間の理解とマクロ・レベルでの不確実な環境の理解との架橋が重要な意味をもっていた。この点について、Whitaker (1977) は「マーシャルのビジョンは、個人の性格と社会経済的な環境との多様な相互作用による複雑な進化プロセスに関係する。環境が社会における多数の個人の性格を変えるよう作用する際、各個人が生活する環境も変わり、個人の性格がさらに追加的に修正されるのである」(p. 179) と述べる。すなわち、マーシャル経済学の体系にとって人間と環境の対が重要な意味をもつ。後にわれわれは、こうしたミクロ・マクロ連環への焦点について立ち返り、さらに議論を深めるつもりである。

とくにマーシャルは、『経済学原理』(Marshall, 1961) の冒頭において述べた。すなわち、

政治経済学ないし経済学とは、生活をなす一般的な仕事に携わる人間の研究にほかならない。福祉の物的条件の獲得・利用ときわめて密接に結びついた個人・社会行動の部分について検討する。したがってそれは、ある側面では富の研究であり、また別の側面では人間の研究の一部をなすといえるが、後者の側面のほうがより重要である (p. 1; 傍点著者たち)。

このようにマーシャルは、富研究より人間研究に重きをおいた経済学のあり方を主張した点で、経済学をモラル・サイエンスとして展開する土台を用意したといえよう (たとえば, Caldari *et al.*, 2020; Loasby, 1989; Taniguchi and Fruin, 2020; Viner, 1941)。

ここで、経済学の学派と伝統との区別を理解するために前述のハーコートの議論に立ち返ろう。Martins (2021) は、ハーコートの3つの要素を、多様な言語を採用する方法論、相互依存性や全体性を重視する形での現実経済の存在論、そして人間のケイパビリティの拡張に向けた社会的余剰の分配にたいする倫理的関心といいかえる。そして、経済学の伝統と学派との区別を強調し、とくに後者が特定の分析枠組の採用という観点から定義されると論じる。他方で Schumpeter (1928) は、説明の仕方、分析手法、個々の分析道具、特定の問題といった面での差異を重視し、経済学の学派ではなくむしろ経済学の伝統にたいして重みづけを与えた。

われわれは、このような学派と伝統とのあいだの厳密な区別を勘案しつつも、以下においては単純化の目的で、ケンブリッジ学派というより広く普及した用語を採用する。そして、この学派の発展にとって不可欠だったマーシャルの高貴な思想、および彼がこの学派の生成に向けて発揚したリーダーシップの諸相を検討するつもりである。

しかしわれわれは、この課題に着手する前に、まずマーシャルの弟子ケインズが『雇用・利子・貨幣の一般理論』(Keynes, 1936: 以下、『一般理論』)によって経済学におこした記念碑的な革命に注目し、マーシャル以降のケンブリッジ経済学の伝統を検討したい。というのも、ハーコートのいうようにケンブリッジ学派の哲学を体現するアイコンだったケインズは、マーシャルのいくつかの見解を明確に否定したが、限定的な意味ではマーシャル派とみなされるからである。

ケインズもマーシャルと同様、ケンブリッジ学派の強力なリーダーとしてミクロ・レベルでの人間の理解とマクロ・レベルでの不確実な環境の理解との健全な結合を重視した。彼はそれにとどまらず、現実経済における制度や人間のアニマル・スピリットの役割にも着目した(たとえば, Dow, 2015; Dow and Dow, 2011; Keynes, 1936; Loasby, 1976, 2011; Robinson, 1971; Taniguchi and Fruin, 2020)。そして、ケインズと彼がケンブリッジに招聘したスラッファそれぞれが着手したマーシャル批判によって、ケンブリッジ学派は、マーシャル派とケインズ派とに分岐した(Martins, 2009)。

Martins (2021) によれば、ケンブリッジ学派はこうした分岐にもかかわらず、社会的余剰の分配が人間のケイパビリティの拡張に及ぼす影響にたいする基本的な倫理的関心をいまだ共有し続けている。したがって、人間と制度のミクロ・マクロ連環を軸にモラル・サイエンスとしての制度経済学を模索するわれわれにとって、マーシャルとケンブリッジ学派に通底するこの高貴な倫理的関心は本質的で、そして彼らの思想の特徴を検討することは重要な課題となりうる。

他方でマーシャルは、人間をとりまく社会環境の改善に努力するという高貴な義務をはたすうえで、モラル・サイエンスとしての経済学が価値ある道具となると認識した(Viner, 1941)。こうした認識は、実際にマーシャルが「強き人間の偉大な母ケンブリッジが世界に送り出す人物は、冷静な頭脳ばかりかあたたかいハートもちあわせ、自分の周囲に存在するつらい社会問題の解決に取り組むために全力の少なくとも一部を与えることをいとわない」(Marshall, 1885, p 174) 者だ、と述べたとき、まさに彼が心のなかで思い描いていたものに相違ないであろう。

さらにわれわれの見解では、ケンブリッジ学派にとって、モラル・サイエンスとしての経済学に向けた倫理的関心の共有だけでなく現実妥当性を重視した方法論の共有も重要な意味をもつ。

この点について、マーシャルは述べた。すなわち、

私は、形而上学から倫理学に転向して、社会の現状を正当化するのは容易ではないと考えるにいたった。……それから私は、休暇中にいくつかの都市の最も貧しい地区を訪れ、最も貧しい人々の表情を観察しながら次々と街路を移動して歩いてみた。次に私は、政治経済学についてできる限り徹底的に研究するという決意を抱いた (Keynes, 1972, p 171)。

そもそも数学から出発して形而上学、倫理学をへて経済学に逢着したマーシャルにとって、現実経済の観察にもとづく研究が重要な意味をもっていた。しかしこのことは、彼が理論を軽視していたことを意味しない点に注意しよう。

他方でケインズも、Demsetz (1969) の用語法に依拠すれば、新古典派の理想を絶対的な基準としてそこから現実経済の乖離を問題とするニルバーナ・アプローチではなく、自由市場経済と混合経済の相対効率にたいする現実的な比較制度アプローチを志向した。だからこそ、既存理論を聖なる与件として現実を矯正するといった閉鎖系における思考停止のわなに陥ることなく、現実経済の深い洞察のなかから既存理論のさまざまな仮定を見直したうえで、開放系としての経済について新しい理論を構築し、適切な政策の策定・実行をつうじて現実経済の問題解決に取り組むことができた。

結局、開放系としての現実経済を不適切に閉鎖系とみなし、現実経済における制度の働きや企業存在を軽視する新古典派理論からは、せいぜいまちがった実践、まちがった政策しか生まれない (たとえば, Aoki, 2001, 2013; Coase, 1937; Chick and Dow, 2005; Ghoshal, 2005; Lawson, 1997, 2019; North, 1990; Williamson, 1975)。

本質的にケインズ革命は、供給が需要を自動的に生み出すというセイの法則を否定し、有効需要の原理を軸に新古典派の伝統に対抗するものだった。あるいは、資本主義を自滅から救済するための革命だった (Robinson, 1971)。そして、もっぱら自由放任だけでは市場の完全な働きにつながらず、政府は次世代の健康・幸福にとって不可欠な役割をはたすべきだという、ケインズの師マーシャルも認識した適切な政府介入にかんするアイデア (Marshall, 1907) を反映した革命でもあった。

Groenewegen (2010) が論じたように、マーシャルは伝統的な課税・補助金政策だけでなく、経済進歩の観点から社会にとって望ましい政府介入をも容認した。マーシャルの政府介入にたいする姿勢は、「寛大で、プラグマティックで、かつ適応力を前向きに示す」 (Reisman, 2006, p 501) たぐいのものであった。もっともマーシャルは、経済は人々の確信さえ回復すれば自己調整力を取り戻せるので、長期的にはセイの法則が成り立つと考えていたのだが (Marshall, 1961)。

つまり、マーシャルとケインズを分かちつなぐ主な論点は、セイの法則の是非をめぐるものだった。かといってケインズは、彼自身「古典派」とよんだマーシャルを含む新古典派の思想を全否定したわけではなかった。この点で、ケインズは述べた。すなわち、

すでに受け入れられてきた古典派の経済理論にたいするわれわれの批判は、その分析上の論理的な欠点を見つけ出す点ではなく、その暗黙的な仮定がほとんど満たされない、あるいはまったく満たされないために、その理論では現実世界のさまざまな経済問題を解決できないということを指摘する点に向けられたのである。だが、われわれの中央統制によって可能な限り完全雇用に近い状態に対応する総産出量の実現に成功すれば、古典派の経済理論はそれ以降、再び息を吹き返すことになろう (Keynes, 1936, p 378: 傍点著者たち)。

かくしてこの革命家は、新古典派の仮定を疑うことで画期的な新兵器を製造したが、残念なことに、この新兵器を駆使して新古典派の息の根を完全に止めてしまうほどの冷酷さをもたなかった。

『一般理論』は、形式的な数学モデルによって新古典派の一般均衡分析へと接ぎ木されてしまう余地を残したため、アメリカを中心とした垂流ケインズ派の手によりケインズの思想の重要な側面がそぎ落とされ、新古典派総合への道が開かれた (Lordewijks, 2003; Robinson, 1971)。

とくに新古典派は、多様な資本を同質的で集計可能で可塑的な「リーツ (leets)」と不適切にみなすことで『一般理論』を去勢し、根源的不確実性に焦点をあて歴史的時間のなかでの分析を重視したケインズ革命の本質的要素を無意味化した (Robinson, 1970; Robinson and Eatwell, 1973)。その結果、歴史的時間のなかで不可避となる根源的不確実性やその下で生成される期待や予想といった人間の要素は、数学モデルから排除され、自由放任への過信はいとも簡単に復活した。結局、新古典派は、現実妥当性を是とするケンブリッジ学派から大きくかけ離れた数学的演繹主義の一形態にすぎないといえよう (Lawson, 2013)。

さらに、スラッファもケインズと同様、マーシャルを土台にした。スラッファは、『一般理論』の弱点を見抜いたばかりか、分配問題を需要と供給の相互作用による均衡化の結果として説明する新古典派の方法を問題視し、分配の決定を外生化したりカード的な分配理論を構築した (Sraffa, 1960)。スラッファの体系では、資本と労働のあいだの社会的余剰の分配は、主流派経済学のいうように限界生産力によって決定されるものではない (Martins, 2021; Mongioli, 2003)。

他方でスラッファは、「他の条件が等しければ」という仮定に依拠したマーシャルの部分均衡分析の非現実性を批判し、収益逡増の下での競争均衡という主題に取り組み、独占モデルの有効性にかんする独自の理解 (Sraffa, 1926) にたどりついた。その結果、ロビンソンの不完全競争革命 (Robinson, 1933) に多大なる影響を与えた (Mongioli, 1996)。

Harcourt and Kerr (2003) が論じたように、革命家ケインズと彼の信奉者であるロビンソンやリチャード・カーン (Richard Kahn) もまた、マーシャルの方法論をつねに意識してきた。とくにケインズは、連続性原理を棄却した点、そして分業が進化する貨幣経済では運動法則によって完全雇用への収斂が保証されないことを認めた点で、尊敬するマーシャルによって伝授された経済学からの離脱を図った。この点を重視する Leijonhufvud (2006) は、ケインズがマーシャルからの離脱によって高貴な理論家に求められる要件を満たしたという深い意味において、彼はマーシャル派とみなされると論じる。要するに、マーシャルはケインズにとって参照点の役割をはたしていたということである。

われわれは、ケンブリッジ学派の研究者がその父マーシャルに学び、彼を超えようとしてきた積年の努力がケインズ革命のみならず不完全競争革命などの新しいパラダイムの生成へとつながり、さらに開放系としての現実経済に配慮した比較制度分析にもつながったと理解したい。「ケンブリッジが経済学の教育・研究という点で最も由緒ある国内外の評判をもつと正当に主張する事実」(Cord, 2017, p vii) は、マーシャルが高貴な目標の下で経済科学の頑健な基礎を提供した賜物なのである。かくしてケンブリッジ学派は、マーシャルの存在なしには多種多様なアイデアを生み出し、めざましい発展を遂げることはできなかったであろう。

ここでわれわれは、ロビンソンも主張したように、ケインズが新古典派の常識を覆し、人間の心理・期待や環境の不確実性が作用するために自己調整力をもちえないという現実経済の性質を浮き彫りにした点を強調しておきたい (Blaug, 1990; Dow, 2015; Keynes, 1936; Lawson, 1985; Loasby, 1976; Robinson, 1971; Shackle, 1972)。というのも、われわれの見解では、この点こそが、新古典派の流れをくむ亜流ケインズ派によって捨象されたケインズのミクロ・マクロ連環 (Taniguchi and Fruin, 2020) にほかならず、この連環はマーシャルの体系にもみられるという点で、ケンブリッジ学派の中核をなすと考えられるからである。

しかしケンブリッジ学派は、マーシャルを1924年に亡くしてから約20年後にはまた別の思想的支柱であるケインズをも失い、組織としての求心力を徐々に低下させていった。Pasinetti (2005) は、ケンブリッジ学派のケインズ派の経済学者は、さまざまな知見の断片をうまく整合させて体系化できなかったうえ、学派を組織化していく過程で協調性を欠いていたため、結果的にケインズ革命の成果を「永続的勝利のパラダイム」(p 839) へと成功裡に導くことができなかったと論じる。パシネッティによれば、彼らは新古典派との闘争という点で一致をみていたにせよ、利己的な姿勢で些末な問題をめぐる内輪もめに陥ることがあり、次世代の経済学者を取り込むための十分な配慮すらも欠いた。

この点にかんしてわれわれは、学派の形成には、知識の成長を可能にする土台となりうる堅固たる高貴な思想だけでなく、学派内の協力を鼓舞しうる強力なリーダーも不可欠であったと論じる。しかしながら、学派の維持となると話は別で、学派内の研究者は、次世代の有望な若者を取り込むために利己心を捨て、学派内の組織的な協力や熟慮をつうじて彼らの育成につとめる必要もあった。

3. マーシャルの2つの二面性

マーシャルは、経済学の科学化・専門化をめざした偉大な思想家であると同時に、その高貴な目的のためには、有望な若者にたいして高いモチベーションやさまざまな機会を与える一方、師にたいして抵抗すらいとわないカリスマ的リーダーでもあった、とわれわれは論じる。だが彼は、自分が理想として掲げた高貴な目標の実現に向けて既存体制を打破することに躍起になり、組織内政治においてあらゆる手段を駆使したようにもみえる。とはいえ、このことは、独立した専門科学として経済学を確立するという「マーシャル革命」の実現にとっては不可避だったといえる

のかもしれない。実際マーシャルにとって、改革への熱意と科学への関心は同じくらい重要な意味をもっていた (Parsons, 1932)。

われわれの見解では、思想家とリーダーというマーシャルの二面性は、ケンブリッジ大学における2つの出来事に明確に表れている。すなわち第1に、マーシャルは若きアーサー・ピグー (Arthur Pigou) に自分の後継者として政治経済学教授チェアを譲るという意思決定を行い、これを大学の教授選挙で現実化するために積極的に取り組んだことである。1903年、産業国家としてのイギリスの衰退をうけ、植民地大臣ジョゼフ・チェンバリン (Joseph Chamberlain) が主導した関税改革では、イギリスとその植民地とのあいだで特惠関税協定を締結し、保護貿易体制を構築しようと画策された。その結果、イギリスを二分するほどの激しい関税改革論争が招来された。マーシャルと30代のピグーは自由貿易を、他方でマーシャルの後継者の座をめぐってピグーのライバルだった50代半ばのハーバート・フォクスウェル (Herbert Foxwell) は保護貿易を、それぞれ主張した。

この点について Coats (1968) は、「実際、1903年の出来事が1908年にケンブリッジでのマーシャルの後継者としてピグーが選出されたことに直接的な影響を及ぼしたと信じるに足る理由がある。それは、イギリス経済学を先導するその学府において経済理論の優位性をゆるぎなきものとした意思決定だった」(p 225) と述べた。つまりこれは、マーシャルによる後継者の意思決定を左右したのは、1903年の関税改革論争での立場上の差異によることを示唆する見解である。

マーシャルと同じくセント・ジョンズ・カレッジに所属し、わがままで頑固なフォクスウェル (Keynes, 1972) は、彼の心のなかでは一線を越えた厄介な存在になったのかもしれない。だからこそ、自分の後継者を選出する教授選挙で投票権すらもたないマーシャルは、ピグーをケンブリッジに残すためになりふりかまわず、フォクスウェル支持派にとどまらずジョン・ネビル・ケインズ (John Neville Keynes: 以下、ネビル) やジョゼフ・ニコルソン (Joseph Nicholson) といった中立派にとっても、ピグーの形勢を不利にしかねないほどかなり強引な仕方選挙に介入し、自分の意中の人物が成功裡に選ばれるよう画策したのかもしれない (Coats, 1972)。

かくしてわれわれは、思想家マーシャルは強い意志で、科学としての経済学発展を、ひいてはケンブリッジ学派の将来を、自分の意にそぐわないフォクスウェルではなく、若きピグーの豊かな才能に賭けて果敢に突進したのだと、やや好意的に解釈しておこう。

他方で Coase (1972) は、マーシャルによる後継者ピグーという意思決定と1903年の関税改革論争とのあいだには何の関係もないとして、マーシャルとフォクスウェルとの方法論の差異に焦点をあてた。コースはこう述べた。すなわち、

フォクスウェルが理論に抱く嫌悪感を、あるいは経済学の歴史的アプローチにみせた熱意を、マーシャルはもちあわせていなかった。さらにいえば、フォクスウェルの専門である経済思想史は、マーシャルにとってはさほど重要でない主題にすぎなかった。経済問題への分析的アプローチを試み、際立った能力と高い可能性にめぐまれたピグーは、マーシャルの琴線にふれないはずはなかった (p 478)。

さらにいえば、マーシャルとピグーのあいだには人間にたいする関心が共通項としてつねにあったが、フォクスウェルはこの関心すらも欠いていた (Whitaker, 1996)。Keynes (1972) が論じたように、何よりマーシャルは、「人間の幸福とよき生活の機会を多分に決定づけるような日常生活の形態・原理を科学的な中立性をもって研究する」(p 172) ことが、経済学者という高貴な職業に求められると考えたのだから。フォクスウェルは、マーシャルが経済学者に求める高貴さの要件を満たしていなかったのだろう。

マーシャルは、自分の後継者を定める5月の教授選挙の投票権をもつネビルを意識したからこそ、その息子ケインズにたいして1908年4月3日に手紙を送り、選挙の結果次第という留保条件をつけながらも、100ポンドの報酬で講師として講義する機会を提供できると提案し、ネビルからピグーへの賛成票をとりつけたという解釈 (Jones, 1978) がある。他方、これを懐疑的にとらえる解釈 (Groenewegen, 1995) もある。しかしわれわれは、これらの解釈の真偽を微細に立ち入り精査する代わりに、マーシャルの王道たるケンブリッジ学派の厚生の伝統を受け継ぐうえで適切な資格を有していたのは、明らかにフォクスウェルではなくピグーであったこと、そしてマーシャルがピグーとケインズという若者たちの才能・将来性を感知し、彼らの道を開くためにリーダーシップを発揚したことを、ここで確認するのにとどめておきたい。

そして第2に、マーシャルは自分の理想とする科学としての経済学を確立するために、ケンブリッジ大学で経済学トライボスの創設に向けて尽力したことである。フォーセットの死後、1884年に政治経済学教授に選任されたマーシャルは、経済学を従来のモラル・サイエンス・トライボスから独立させ、政治学とあわせて新しいトライボスをつくろうと試みた (Groenewegen, 1988)。

だがヘンリー・シジウィック (Henry Sidgwick) は、経済学を哲学的課題から分離することによって否定的で、マーシャルが意図したような教育制度における経済学の独立・専門化にたいして強く反対した。かくして、「モラル・サイエンスにおける彼の弟子」(Keynes, 1972, p 168) だったマーシャルは、自分の高貴な目標の実現に向けて師にたいしてすら刃を向けなければならなかった。結果的にマーシャルの悲願は、彼の死後の1903年にかない、経済学トライボスの創設にいたった (Groenewegen, 1988)。

次に、思想家マーシャルの体系には、物理学に依拠した均衡の側面と、生物学に依拠した進化の側面という、不整合な二面性がある。この二面性は、経済における需要と供給の市場均衡と、人間進歩と経済進歩の共進化を示唆する有機的成長 (たとえば, Caldari, 2004; Marshall, 1961; Metcalfe, 2006) という対比に反映されている。そして、新古典派経済学と進化経済学という互いに不整合なパラダイムが、彼の体系のなかに共存することを示す。要するにマーシャルは、限界効用原理をつうじて効用の観点から富研究を進めた側面に加え、この側面よりも人間の性格と経済環境との関係性を扱う人間研究を相対的に重視した側面をもつ (Parsons, 1949)。

この点にかんしてわれわれは、マーシャルの体系の内部で異質なパラダイム間の緊張関係が生じたがゆえに、彼の経済生物学の試みは失敗したと批判的に評価するスタンス (たとえば, Hart, 2013; Niman, 1991) とは対照的に、こうした緊張関係がある種の弁証法的な運動を内生的に生み出すことで、彼の思想を偉大な体系へと昇華させるのに役立ったと論じたい (たとえば, Raffaelli,

2003)。マーシャルの体系における弁証法にかんして、Cook (2009) は述べる。すなわち、

マーシャルのビジョンは、一方で自己意識、他方で機械的な習慣や社会的組織が互いに織りなす多様で持続的な相互作用にかんするものであり、それによって、伝統的な慣習が現代的な産業の習慣へ持続的に転換されていき、……経済の全部門にわたって道徳的自律性が次第に広まっていく結果がもたらされる (p 288)。

換言すれば、社会的現実の人間的要素と経済的要素との弁証法的相互作用から進歩が生まれるが、その際、まず人間的要素が経済的要素の進歩の前提条件となった後、次々と立場を変えながら相互に構成・再構成を続けていく点に、マーシャルの社会哲学の要諦があるというのが、クックの見解である。われわれもクックの見解に同意し、マーシャルが時間をつうじたミクロ・マクロ連環の進化を強調した点を精査すべきだと考える。

この点は、新古典派経済学の発展に貢献した顔以外に、人間と環境の双方を勘案した進化経済学を志向した別の顔ももちあわせていたマーシャルの二面性について論じた Martins (2014) の見解によっても支持されよう。彼は述べる。すなわち、

マーシャルの概念化は、古典派の政治経済学をより際立たせたアプローチと、限界主義により生み出された数学志向性を是とする傾向とのあいだの緊張関係を反映している。ニュートン物理学は『経済学原理』第I巻の多くに息吹を与えたが、すべての経済学者のメッカは生物学にあるとマーシャルが記したという事実に、彼のアプローチに内在する緊張関係はしばしば結びつけられることがある。しかしマーシャルにとって、数理物理学と生物学はさほどかけ離れていなかったともいえるかもしれない。……マーシャルの社会理論は古典派の政治経済学者やマルクスと同様、社会構造と個人は存在論的な意味で相互に還元しえない、という基本的なビジョンによって支えられている (pp 294-5: 傍点著者たち)。

結局、マーシャルの体系を支える個人と社会構造——すなわち、制度——との関係性をめぐるこのビジョンこそが重要な意味をもつ。

かくして、マーシャルのビジョンは、個人が制度を構成する一方、制度によって構成される双方向的なミクロ・マクロ連環を示唆するもので、制度経済学の中核をなす (Hodgson, 1993, 2004)。個人と制度とは存在論的に区別される実在であり、互いに一方は他方が存立するための必要条件となっているので、どちらか一方に還元することはできない (Bhaskar, 1978)。さらに、ミクロ・マクロ連環に焦点をあて個人と制度の双方から説明をはじめることにより、所与の個人に依拠して制度の創発を説明する場合に予想される無限後退問題を回避できよう (たとえば、Aoki, 2001, 2010; Bhaskar, 1978; Foss, 1994, 1998; Hodgson, 1998, 2007A, B; Lawson, 1997, 2019)。

端的に言えば、マーシャルは制度経済学者として位置づけられる。この点で Baumol (2000) も、「マーシャルはとくに本心では制度主義者だったことに加え、彼の一連の仕事の際立った特徴は

こうした（制度的）問題に注意を向けている点にあったことは明白で、この著者は理論にかんする体系的な議論を副次的な問題とみなしていたように、私には思われる」（p 33: 括弧内著者たち）と述べた。

したがって、われわれは、マーシャルのビジョンを勘案するに、彼がミクロ・マクロ連環を重視した制度経済学者だという見方を採用するものの、ポーモルの評価とは対照的に、マーシャルは理論を現実より劣後するものとして位置づけてはいなかったと論じる。Pratten(1998) は、マーシャルが現実妥当性を重視する方向に熱心だったとはいえ、こうした方向性は、前期段階では「他の条件が等しければ」という囲いのなかに閉じ込めておいた変数を後期段階でより多く勘案した理論の構築を意味すると論じる。われわれは、現実を重視することはかならずしも理論の軽視を意味するとは限らない点に、特段の注意を払っておこう。マーシャルは、理論と現実のバランスをどう実現するかという点で熟慮を重視した。

マーシャルは、人間と制度のミクロ・マクロ連環にかんする現実的なビジョンを抱き、まず物理学志向の新古典派経済学から出発した後、次第に生物学志向の進化経済学——彼の言葉では、経済生物学——へ移行し、科学として経済理論を構築しようという意図を保持し続けた。このことは、彼の言明に表れていよう。すなわち、

経済学者がめざすメッカは、経済動学ではなく経済生物学にある。だが、生物学の概念化は力学のそれと比べてより複雑である。したがって、本書の基本にかかわる部分では、力学的アナロジーにたいして相対的に大きな位置づけを与えなければならない。そして、頻繁に「均衡」という用語を用いるが、それは静学的アナロジーを示唆するものである (Marshall, 1961, p xiv)。

他方で彼は、均衡についてこう続ける。すなわち、

需要と供給の均衡にかんする一般理論は、分配と交換という中心的な問題にかかわるさまざまな部分すべてにあまねく通底する基本的なアイデアである (Marshall, 1961, p viii)。

基本的に需要と供給の均衡は、需要サイドで財の消費により獲得される買手の効用と、供給サイドで財の生産のために費消される売手の不効用とのあいだの主観的な緊張関係を含意する。他方で、双方のサイドがうけいれる価格の下で財の生産と消費とが一致するが、市場清算を可能にするそうした価格は、均衡価格として客観的な意味づけがなされる。

だが、こうした新古典派の抽象概念としての均衡はコインの一面でしかない。すなわち、マーシャルには、ケイパビリティや経済活動のコーディネーションの帰結として歴史的時間のなかでうまく実現した秩序の状態を含意する均衡のもう1つの面が存在する (Dow, 2020; Loasby, 1991)。このことは、均衡を前面に押し出した前期段階の経済力学のまま経済学を終わらせようとしなかったマーシャルの意図からも推論できるだろう。彼は述べる。すなわち、

私は、経済学が後期段階に進むにつれ、物理学と比べて生物学からより適切なアナロジーをえられるようになっていくと思う。したがって、経済学的推論は物理的な静学の方法と似た方法にもとづいてまず着手すべきで、次第に生物学の色彩を強めていくべきだと考える (Marshall, 1898, p 314)。

実際、われわれはここで経済進歩という高貴な主題に近づこうとしている。したがって、ここで経済問題をもっぱら静学的な均衡の問題としてとらえ、有機的成長の問題をとらえない場合には、経済問題は不完全な形で提示されていることを想起する必要がある (Marshall, 1961, p 461)。

結局、マーシャルの真骨頂は、生物学的アナロジーに依拠しながら経済問題を有機的成長として理解するという進化経済学にある。彼にとって、物理学的な新古典派経済学は生物学的な進化経済学の前座にすぎなかった。

この点にかんして Collard (1990) は、マーシャルのオルガノン (方法論の原則) は、力学的というより、むしろ進化論的な中核的理論を土台として、高貴な研究動機と正しい理解を重視するスタイル、専門化志向性、そして具体的真理を発見する能力によって構成され、彼のオルガノンの存続・成長にとっては、ケンブリッジ大学で創設された経済学トライボスと、『エコノミック・ジャーナル (*Economic Journal*)』という2つの制度が不可欠だったと論じる。したがってわれわれは、コラードの見解からも、マーシャルの体系は相対的に進化論的志向性が強かったことがみてとれよう。

そして、有機的成長についてマーシャルは、人間、環境それぞれに働く自然法則の共通部分は、「社会的組織であれ物理的組織であれ、有機体の発達にともない、これを構成する個別の部分のあいだで機能の分化が進展する一方、個別の部分のあいだの結びつきはより緊密化する、という一般準則として表現される」(1961, p 241) と論じた。すなわち、彼にとって、人間と自然に共通する有機的成長の一般準則とは、個体の分化と個体間の関係性の緊密化が進展する点にあった。

かくして、われわれは、制度経済学者マーシャルは生物学的アナロジーを援用することで、個体の異化と個体間の統合、人間と環境のミクロ・マクロ連環を軸とした共進化 (Taniguchi and Fruin, 2020) を理解するための進化経済学をめざしたと主張する。

4. 結語

経済学における人間研究を重視したマーシャルは、思想家としてケンブリッジ学派の確固たる知的地盤を築いただけでなく、リーダーとしてケンブリッジ大学において経済学の科学化・専門化に貢献した。彼の偉大な体系には、物理学的アナロジーに依拠して需要と供給の均衡を分析する新古典派経済学の側面と、生物学的アナロジーに依拠して現実的な経済問題を有機的成長として理解する進化経済学の側面とが同居している。われわれの見解では、彼の知的貢献は、社会的

余剰の分配が人間のケイバビリティの拡張に及ぼす影響にたいする高貴な倫理的関心だけでなく、現実妥当性を重視した比較制度分析の方法論も、ケンブリッジ学派が発展・共有するうえで重要な役割をはたしたことであるようにみえる。

マーシャルは、あるがままの人間の多様性・全体性を認識し、人間の性格の変化というミクロ・レベルの人間進歩と、福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルの経済進歩とを結びつけた点でミクロ・マクロ連環に焦点をあてた、とわれわれは論じた。そして彼は、広範な人間観にもとづく経済学の科学化・専門化をめざしたという意味において、何より人間研究者でもあり、人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向したとみなされる。

ケンブリッジ学派の父マーシャルの高貴な問題意識に立ち返るとすれば、21世紀において経済学には人間研究が求められていよう。われわれは、この点を強調することで本論文を結びたい。

参 考 文 献

- Aoki, M. 2001. *Toward a Comparative Institutional Analysis*. Cambridge, MA, MIT Press
- Aoki, M. 2010. *Corporations in Evolving Diversity: Cognition, Governance, and Institutions*. Oxford, Oxford University Press
- Aoki, M. 2013. *Comparative Institutional Analysis: Theory, Corporations and East Asia. Selected Papers of Masahiko Aoki*. Cheltenham, Edward Elgar
- Baumol, W. J. 2000. What Marshall *didn't* know: on the twentieth century's contributions to economics, *Quarterly Journal of Economics*, vol. 115, no. 1, 1-44
- Bhaskar, R. 1978. *A Realist Theory of Science*. Brighton, Harvester-Wheatsheaf
- Blaug, M. 1990. *John Maynard Keynes: Life, Ideas, Legacy*. London, Macmillan
- Caldari, K. 2004. Alfred Marshall's idea of progress and sustainable development, *Journal of the History of Economics Thought*, vol. 24, no. 4, 519-36
- Caldari, K., Dardi, M., and Medema, S. 2020. *Marshall and the Marshallian Heritage: Essays in Honour of Tiziano Raffaelli*. London, Palgrave Macmillan
- Chick, V. and Dow, S. 2005. The meaning of open systems, *Journal of Economic Methodology*, vol. 12, no. 3, 363-81
- Coase, R. H. 1937. The nature of the firm, *Economica*, vol. 4, no. 16, 386-405
- Coase, R. H. 1972. The appointment of Pigou as Marshall's successor, *Journal of Law and Economics*, vol. 15, no. 2, 473-85
- Coats, A. W. 1968. Political economy and the tariff reform campaign of 1903, *Journal of Law and Economics*, vol. 11, no. 1, 181-229
- Coats, A. W. 1972. The appointment of Pigou as Marshall's successor: comment, *Journal of Law and Economics*, vol. 15, no. 2, 487-95
- Collard, D. A. 1990. Cambridge after Marshall, pp 164-92 in Whitaker, J. K. (ed.), *Centenary Essays on Alfred Marshall*. Cambridge, Cambridge University Press
- Cook, S. J. 2009. *The Intellectual Foundations of Alfred Marshall's Economic Science*. New York, Cambridge University Press
- Cord, R. A. 2017. Introduction, pp vii-viii in Cord, R. A. (ed.), *The Palgrave Companion to Cambridge Economics*, vol. 2. London, Palgrave Macmillan
- Cord, R. A. (ed.), 2017. *The Palgrave Companion to Cambridge Economics*, vol. 2. London, Palgrave Macmillan
- Demsetz, H. 1969. Information and efficiency: another viewpoint, *Journal of Law and Economics*, vol. 12, no. 1, 1-22
- Dow, A. and Dow, S. C. 2011. Animal spirits revisited, *Capitalism and Society*, vol. 6, no. 2, 1-23
- Dow, S. C. 2015. Addressing uncertainty in economics and the economy, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 39, no. 1, 33-47

- Dow, S. C. 2020. Alfred Marshall, evolutionary economics and climate change, Department Discussion Paper DDP2001, October, University of Victoria
- Foss, N. J. 1994. Why transaction cost economics needs evolutionary economics, *Revue d'économie industrielle*, vol. 68, no. 2, 7-26
- Foss, N. J. 1998. The competence-based approach: Veblenian ideas in the modern theory of the firm, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 22, no. 4, 479-95
- Friedman, M. 1953. *Essays in Positive Economics*. Chicago, University of Chicago Press
- Ghoshal, S. 2005. Bad management theories are destroying good management practice, *Academy of Management Learning and Education*, vol. 4, no. 1, 75-91
- Gram, H. 2011. Six titans of the Cambridge School: a review article, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 35, no. 5, 973-94
- Groenewegen, P. D. 1988. Alfred Marshall and the establishment of the Cambridge economic tripos, *History of Political Economy*, vol. 20, no. 4, 627-67
- Groenewegen, P. D. 1995. *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842-1924*. Aldershot, Edward Elgar
- Groenewegen, P. D. 2010. Marshall on welfare economics and the welfare state, pp 25-41 in Backhouse, R. E. and Nishizawa, T. (eds.), *No Wealth but Life: Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945*. Cambridge, Cambridge University Press
- Harcourt, G. C. 2003. Cambridge economic tradition, pp 44-51 in King, J. E. (ed.), *The Elgar Companion to Post Keynesian Economics*. Cheltenham, Edward Elgar
- Harcourt, G. C. and Kerr, P. 2003. Keynes and the Cambridge School, pp 343-59 in Samuels, W. J., Biddle, J. E., and Davis, J. B. (eds.), *A Companion to the History of Economic Thought*. Oxford, Blackwell
- Hart, N. 2013. *Alfred Marshall and Modern Economics: Equilibrium Theory and Evolutionary Economics*. Hampshire, Palgrave Macmillan
- Hodgson, G. M. 1993. *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*. Cambridge, Polity Press
- Hodgson, G. M. 1998. The approach of institutional economics, *Journal of Economic Literature*, vol. 36, no. 1, 166-92
- Hodgson, G. M. 2004. *The Evolution of Institutional Economics: Agency, Structure, and Darwinism in American Institutionalism*. London, Routledge
- Hodgson, G. M. 2007A. Institutions and individuals: interaction and evolution, *Organization Studies*, vol. 28, no. 1, 95-116
- Hodgson, G. M. 2007B. Meanings of methodological individualism, *Journal of Economic Methodology*, vol. 14, no. 2, 211-26
- Hutchison, T. W. 1981. *The Politics and Philosophy of Economics: Marxians, Keynesians and Austrians*. Oxford, Basil Blackwell
- Jones, T. W. 1978. The appointment of Pigou as Marshall's successor: the other side of the coin, *Journal of Law and Economics*, vol. 21, no. 1, 235-43
- Keynes, J. M. 1925. Alfred Marshall, 1842-1924, pp 1-65 in Pigou, A. C. (ed.), *Memorials of Alfred Marshall*. London, Macmillan
- Keynes, J. M. 1936. *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London, Macmillan
- Keynes, J. M. 1972. *Essays in Biography*, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X. London, Macmillan
- Lawson, T. 1985. Uncertainty and economic analysis, *Economic Journal*, vol. 95, December, 909-27
- Lawson, T. 1997. *Economics and Reality*. London, Routledge
- Lawson, T. 2013. What is this 'school' called neoclassical economics? *Cambridge Journal of Economics*, vol. 37, no. 5, 947-83
- Lawson, T. 2019. *The Nature of Social Reality: Issues in Social Ontology*. London, Routledge
- Leijonhufvud, A. 2006. Keynes as a Marshallian, pp 58-77 in Backhouse, R. E. and Bateman, B. W. (eds.), *The Cambridge Companion to Keynes*. Cambridge, Cambridge University Press
- Loasby, B. J. 1976. *Choice, Complexity and Ignorance: An Enquiry into Economic Theory and the Practice of Decision Making*. Cambridge, Cambridge University Press
- Loasby, B. J. 1989. *The Mind and Method of the Economist: A Critical Appraisal of Major Economists in the Twentieth Century*. Aldershot, Edward Elgar
- Loasby, B. J. 1991. *Equilibrium and Evolution: An Exploration of Connecting Principles in Economics*. Manchester,

- Manchester University Press
- Loasby, B. J. 2011. Uncertainty and imagination, illusion and order: Shackleian connections, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 35, no. 4, 771–83
- Lordewijks, J. 2003. Bastard Keynesianism, pp 24–9 in King, J. E. (ed.), *The Elgar Companion to Post Keynesian Economics*. Cheltenham, Edward Elgar
- Marshall, A. 1885. The present position of economics, pp 152–74 in Pigou, A. C. (ed.), *Memorials of Alfred Marshall*. London, Macmillan
- Marshall, A. 1898. Mechanical and biological analogies in economics, pp 312–8 in Pigou, A. C. (ed.), *op.cit.*
- Marshall, A. 1907. Social possibilities of economic chivalry, pp 323–46 in Pigou, A. C. (ed.), *op.cit.*
- Marshall, A. 1961. *Principles of Economics*, Text, 9th ed. London, Macmillan
- Martins, N. O. 2009. Sen's capability approach and Post Keynesianism: similarities, distinctions, and the Cambridge tradition, *Journal of Post Keynesian Economics*, vol. 31, no. 4, pp 691–706
- Martins, N. O. 2014. *The Cambridge Revival of Political Economy*. London, Routledge
- Martins, N. O. 2021. The Cambridge economic tradition and the distribution of the social surplus, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 45, no. 2, 225–41
- Metcalfe, J. S. 2006. Evolutionary economics, pp 651–7 in Raffaelli, T., Becattini, G. and Dardi, M. (eds.), *The Elgar Companion to Alfred Marshall*. Cheltenham, Edward Elgar
- Mongiovi, G. 1996. Sraffa's critique of Marshall: a reassessment, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 20, no. 2, 207–24
- Mongiovi, G. 2003. Sraffian economics, pp 318–22 in King, J. E. (ed.), *The Elgar Companion to Post Keynesian Economics*. Cheltenham, Edward Elgar
- Niman, N. B. 1991. Biological analogies in Marshall's work, *Journal of the History of Economic Thought*, vol. 13, no. 1, 19–36
- North, D. C. 1990. *Institutions, Institutional Change, and Economic Performance*. Cambridge, Cambridge University Press
- Parsons, T. 1931. Wants and activities in Marshall, *Quarterly Journal of Economics*, vol. 46, no. 1, 101–40
- Parsons, T. 1932. Economics and sociology: Marshall in relation to the thought of his time, *Quarterly Journal of Economics*, vol. 46, no. 2, 316–47
- Parsons, T. 1949. *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. New York, Free Press
- Pasinetti, L. L. 2005. The Cambridge School of Keynesian economics, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 29, no. 6, 837–48
- Pratten, S. 1998. Marshall on tendencies, equilibrium, and the statical method, *History of Political Economy*, vol. 30, no. 1, 121–63
- Raffaelli, T. 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*. London, Routledge
- Reisman, D. A. 2006. State intervention, pp 495–501 in Raffaelli, T., Becattini, G. and Dardi, M. (eds.), *The Elgar Companion to Alfred Marshall*. Cheltenham, Edward Elgar
- Robbins, L. 1932. *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*. London, Macmillan
- Robinson, J. V. 1933. *The Economics of Imperfect Competition*. London, Macmillan
- Robinson, J. V. 1970. Capital theory up to date, *Canadian Journal of Economics*, vol. 3, no. 2, 309–17
- Robinson, J. V. 1971. *Economic Heresies: Some Old-fashioned Questions in Economic Theory*. London, Macmillan
- Robinson, J. V. and Eatwell, J. 1973. *An Introduction to Modern Economics*. London, McGraw-Hill
- Schumpeter, J. A. 1928. The instability of capitalism, *Economic Journal*, vol. 38, no. 151, 361–86
- Shackle, G. L. S. 1972. *Epistemics and Economics: A Critique of Economic Doctrines*. Cambridge, Cambridge University Press
- Sraffa, P. 1926. The laws of returns under competitive conditions, *Economic Journal*, vol. 36, no. 144, 535–50
- Sraffa, P. 1960. *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*. Cambridge, Cambridge University Press
- Stigler, G. J. 1990. The place of Marshall's *Principles* in the development of economics, pp 1–13 in Whitaker, J. K. (ed.), *Centenary Essays on Alfred Marshall*. Cambridge, Cambridge University Press
- Taniguchi, K. S. and Fruin, W. M. 2020. A research agenda for institutional economics as a moral science: the

Cambridge School in the twenty-first century. Unpublished draft

Viner, J. 1941. Marshall's economics, in relation to the man and his times, *American Economic Review*, vol. 31, no. 2, 223-35

Whitaker, J. K. 1977. Some neglected aspects of Alfred Marshall's economic and social thought, *History of Political Economy*, vol. 9, no. 2, 161-97

Whitaker, J. K. (ed.), 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall Economist*, vol. 2. Cambridge, Cambridge University Press

Williamson, O. E. 1975. *Markets and Hierarchies: Analysis and Antitrust Implications*. New York, Free Press

W. マーク・フルーエン [サンノゼ州立大学マネジメント・スクール]